短編シリーズ

おにゃのこのカケラ

vol.2

ゆきの

「あのさ、結依…。」
「えっ？何？」
ランチを食べに、彼氏とフレンチカフェに来たはずの結依は、この日もまた、ぼんやりと何かを考えていた。
「さっきの俺の話、聞いてた？」
彼は、残っていたパスタを一気に口の中に詰め込む。彼女とのデートを楽しんでいるようには、見えなかった。
「あ…。ごめん、ちょっと、私、ぼーっとしちゃってて…。」
ガシャン！ と、故意に派手な音を立てて、彼はフォークを置いた。
「…この頃、俺と会っててもいつもそんな感じじゃん？」
そう言って、彼は深くため息をついた。
苛立った彼の表情が怖くて、何も言い返せずに、結依は半分ほども料理が残っている皿の端にシルバーを寄せる。
「話しかけても上の空でさ。…一体、俺以外の誰のこと考えてるの？」
「誰…って、別に、そんな！」
まさか浮気を疑われてるとは思わなくて、結依は慌てて胸の前で両の手のひらを広げた。
「さっきも、言ったんだけど。ね？最近の結依のこと見てて、俺より好きなヤツ、できたんじゃないかと思ってたんだ。」
彼の目は、もう、怒ってはいない。呆れていた。
「いや、ホントに。別に…好きな人なんて…。」
「結依はさ、俺といて楽しい？」
「……うん？」
「俺はなんか…デート中もぼやっとしてる結依見てると、浮気してんじゃないかとか嫉妬ばっかして楽しくねぇよ。こんなデート、本当に楽しいの？」
「…わかんない。」
「…なんだよ、それ。」
彼は目を伏せて、２、３度頷くと吐き捨てるように言った。
「なぁ、俺たちもうダメだよな？今日で終わりにしよ。じゃ！」
結依に反論の余地も与えず、彼はテーブルに五千円札を叩きつけて足早に店を出て行ってしまった。

後を追いかけようとは、考えなかった。
目の前で起きたことにただ呆然として、たった今、男に振られたんだと理解するまで、数分かかった。
不思議と、悲しみは感じない。
また、頭の中がぼんやりしてきて、どこか遠くで、声が聞こえた気がした。

『コレデヨカッタンデショ？』

結依は、反射的につぶやいていた。
「わかんない…。」

アパートに帰ってからも、結依はひとり、壁に寄りかかって呆けていた。
外がだいぶ暗くなった頃、バッグにしまったままだった携帯を取り出し、電話帳から、今日振られた彼のメモリを消した。彼の画像が入ってたピクチャーフォルダも、彼のメールが残ってたメールボックスも、まとめて全消去した。

なんだか、すっきりした気分だ。幼馴染にメールしてみようか…。
結依は地元で予備校に通う浪人生の友達にメールを打ち始めた。
『元気？聞いてよー、私、今日ね、付き合ってた彼に振られ…』
そこまで打って、しばらく考えた後、結依は文章を全部消して、もう一度、始めから打ち直す。
『メール、久々だね。元気にしてる？私、夏休み長くて退屈になってきたから、ちょっと、実家にかえろっかなー。歩未んちに、遊びに行ってもいい？また、海とか眺めたくなった。』

大学進学とともに、この春上京した結依は、９月に入って初めて帰省した。電車を乗り継いで、４時間半。生まれ故郷の小さな田舎町に近づくと、見慣れた海辺の風景を窓から見下ろすことができた。波がキラキラと太陽の光を反射して…結依は自分のふるさとを初めて、「美しい」と思った。

歩未とは何度かメールを交わし、週末の夕方に泊りがけで家に遊びに行くことに決めた。

当日。
『久しぶりだし、夕食は一緒に食べましょ』と、言う歩未の母親の言葉に甘えることにして、東京土産を持って夕方の６時半に歩未の家を訪ねた。本当に久しぶりだ。チャイムを鳴らすとすぐ、ドアが開く。
「あらあら、結依ちゃんたら綺麗になってー！あゆはね、ちょっと家庭教師の先生との勉強が長引いてるみたい。ここで、座って待っててね！」
歩未の母に促されて、リビングのテーブルに着くと、ものの数分で歩未が２階から降りてきた。
「ユイー。久しぶりー。おまたせー。」
「わー。歩未変わってないね！」
「ユイはすっかり垢抜けちゃったねぇ。すごーい。」
歩未の母は忙しく動いて、テーブルの上にはすぐに料理が並びだした。
「さっ、食べましょ。」
と、勧められて…結依は小さな疑問に気がついた。
「あ、あの。」
「どしたのー？ユイのお箸、ここにあるよ。」
歩未は、もうお味噌汁をすすっていた。
「いや、歩未の先生って、もう帰ったの？」
「は？」
「家庭教師の先生。今、勉強してたんだよね？」
歩未は、結依が口にした疑問に納得し、口の中の物を飲み込むと、頷きながら答えた。
「あー。んとねー。先生はね、うちに直接は来ないの。」
「…どうゆうこと？」
「授業は、パソコンでネット回線を使ってスカイプでやるから、先生は自宅とかセンターからつないでるわけ。」
結依はちょっと考えてから口を開いた。
「スカイプ、ってチャットだよね？声だけで授業？」
「そー。チャットだけどねー。お互いライブカメラ使ってるから…、ま、興味あったら後で見せたげるよ。ん、この唐揚げ美味いよー。ほらー、食べて、食べてー。」
「あ…いただきます…。」

最初は遠慮がちに食べていた結依も、昔のように次第に打ち解け、歩未の母に勧められるままおかわりまでしていた。

夕食を終えて、一息ついた後、二人は歩未の部屋のある２階に上っていった。
「えへへー。あんまり片付かなくって。ごめんねー。」
前置きをしてから、歩未は自分の部屋に結依を通した。
「うわ！でかいパソコン…って、何で３台？」
「んー？パソコンはひとつだけど？…あ、モニター？」
「…うん。」
歩未の部屋はなんだか、女の子らしい、という感じの部屋ではなくなってしまっていた。
「んとー。右のが、TV。CSで講義見るからねー。あと、真ん中の一番でかいのがメインで、左のはサブモニタだよ。」
「えー。CS見れんの？いいな。」
結依はのんきに呟いた。
「いやいやー、予備校のサテライト見るためだよ。」
歩未は、疑問だらけの様子の結依に、なるべく簡潔に説明をした。
「んー。予備校って言ってもね、私が入ってるとこはデジタルスクールだから、普段の授業は学校には行かずに家でCS放送を見ながら勉強するの。」
そう言って、歩未はTVをつけてみせた。
「ほら、夜とか休日とかは再放送してんの。」
内容を見ると、女の先生がホワイトボードを使って、漢文の授業をやっていた。
「へぇー…。この部屋にいるだけで、勉強できちゃうのか…。」
「模試とかがある時は、仙台の本校まで行って受けるんだけどね。」
バカでかいデスクと、その上の３台並んだ、これまたでかい液晶モニター、いろんな色のよく分からないコード類…。
結依には、それらは無機質なオブジェに見えた。
「ねー。浪人中の私の話なんて大して面白くないでしょー。」
歩未は、ベッドの上に勢いをつけて倒れこむ。
「ううん、なんか、びっくりした。パソコンとか、詳しいんだね、歩未。」
結依は、歩未の隣にちょこんと座った。
「んー。そんなに。ただの引きこもりだよー。それよりさぁ、ユイの事教えてよー。大学楽しい？」
急に体を起こした歩未は、目を輝かせて聞いた。
「…うん、まぁまぁね。…あっ！」
「え？」
結依は、窓をの外を見て、声を上げる。
「夕日！すごい赤い！ね、ベランダに出てもいい？」
「あー。何かと思ったー。いいよー。」

二人は、順番にベランダに上がった。

潮風の吹く ベランダで

「きれーい！夕日が海に沈むとこって、感動するよね！」
「あー。ユイは久々かぁ…。」
ベランダの真っ白な手すりから、結依は身を乗り出すようにして海を眺めた。
「このベランダいいよね！前にも一度、ここで夕日を見せてもらったっけ。懐かしいな…。」
潮風が、栗色に染めた結依の長い髪を乱した。
寄せては返す、波の音だけが、人気のなくなった浜辺を包む。
赤く染まった夕日は、静かに水平線の向こうに消え、二人は無言で最後までオレンジ色の光を見送った。

完全に日が沈んだのを見計らうように、歩未が口を開いた。
「ねーえ？こういう事さー、聞いてもいいかな？」
結依は苦笑して、
「こういう事って何よ？わかんないよ。」
と返した。
「あのねー。映画とかで、えっと…口をはむはむ動かしながらさぁ、キスしてるのあるじゃん？」
「ハハ。…はむはむって、…わかるけど。」
「あれってー、…オトナのキス？」
結依は思わず、ぷっ、と吹き出してしまった。歩未は昔から、こういうところは変わってない。
「えー。ちょっとー。わかんないから聞いてんのにっ！」
歩未は、可愛らしく唇を尖らしてほっぺたを膨らませた。
「いや、うん、ごめん。確かに、そうだね。えっと、はむはむはディープキスしてるよね。」
ベランダの手すりに頬杖をついて、歩未はちょっと考える仕草をした。
「あれー？」
「ん？」
「ってことはさー、…うーん？オトナのキスの事を、ディープキスって言うの？」
また吹き出しそうになりながら堪える結依。歩未は真面目だ。真剣に聞いているんだ。
「う…ん。そう、だよ。」
首を傾げたまま、さらに、質問を続ける。
「んーと…。ユイは色々知ってると思うから、どんどん聞いちゃうけどー。」
「色々って、何さ…。」
歩未の真似をして、結依も頬杖をついてみた。なんだか変な展開になってるな、と思いながら。
「普通のキスとはさー、どう違うのかなぁ？」
「うん…。や、あれは…いわゆる、ベロチュウ？」
「あ？舌？」
「そ、そうそう。」

ベランダに吹く潮風は、少しずつ冷たくなっていく。
反対に、結依の心臓は不思議に熱くなっていき、変な汗が出始めた。
手のひらを自分のスカートで何度か拭った。
「…でー、舌を…どうすんの？」
「うー。何ていうか…、だねぇ。」
「うん、うんっ！」
どうしても、歯切れの悪い答え方しかできない。結依は、頭を抱え始めた。
にもかかわらず、歩未の方は、ひときわ目を輝かせて結依の顔を覗き込んでくるのだ。
「…で？」
「…。ま、彼氏とかできたらさ、わかるんじゃない？」
結依は説明を放棄して、乾いた笑いを浮かべる。
答えを待っていた歩未は、急に不機嫌になった。
「えー。何それー。彼氏いる人の余裕の発言？…バカにしてんでしょ…。」
「あ…ごめん！馬鹿にしてるわけじゃないってば…。」
「だって！」
歩未はいったん言葉を切り、明後日の方を向いて呟いた。
「ユイは、もう、経験あるんでしょ？」
答えに困る鋭い質問ばかりで、口ごもる結依。
「そりゃ、まぁ…、ハイ。」
「ずるーい。私にも教えてよー。」
「いや、教えてって…。」

その時、結依にちょっぴりのいたずら心が生まれた。
歩未の肩に手を乗せて、自分の方に引き寄せた。
柔らかな猫っ毛の歩未の前髪を、すぃ、と、耳にかけてやる。
結依は薄暗くなったベランダで、何の抵抗もしないのをいいことに、歩未のファーストキスを奪ってやった。
ふっくらとした瑞々しい唇の感触を、惜しみながらあごを引いた。
初めての女の子相手のキスは意外に嫌な気分ではなく…。
「…ねー？」
「ん？」
吐息がかかるほどの距離で、歩未が囁いた。
「オトナのキスは？」
ここまできたら、と、結依は腹をくくった。ねだる歩未が悪いのだ。
歩未の背中と首の後ろにきつく腕を回して、再び、唇を重ねる。逃がさない。
ぴったりと、口をふさいだ後、少し斜めに唇をずらし、舌の先で、歩未の唇の輪郭を軽くなぞっていった。

「…ん、ふっ…。」
甘い声が漏れるとともに歩未の口元が薄く開くと、その隙に舌をもぐりこませる。
結依は逃げようとする舌を、強引に絡め取った。
「…ふぅ。」
一度、腕を緩めると、歩未は虚ろな瞳で息を吐いた。
「ダメ。歩未からも。」
そう言って、結依は誘うように、今度は軽く唇を触れさせた。
意味を理解した歩未は、自分からそっと口を開いておずおずと舌を差し出した。
入ってきた歩未の舌を味わうように優しく吸ってやる結依。
「ん、あ…ぅん…。」
うっとりとした目で、小さく喘ぐ歩未はいつになく色っぽく見える。
何度か繰り返すうちに、歩未は結依の真似をしてくるようになり、二人は長い間、オトナのキスを交わした。
「…あっ…？」
「どした？ちゃんと、分かった？」
結依はいたずらっぽく笑った。
「あのー…。」
歩未が妙に可愛らしくもじもじしている。
「ん？」
「いやー、ちょっと…変…。」
そう言って、歩未は慌てた感じでベランダから部屋に降りていった。
さすがに風が冷たくなってきたので、結依もベランダを降り、鍵をかけて歩未のそばに戻った。

歩未はうつむいたまま、ベッドの上に腰を下ろしていた。
なんだか気まずくて、少し、間を空けて結依が座った。
「アハハ。彼氏ができたときのための予行練習にしては、ちょっと頑張りすぎたかな？」
わざと茶化して言ってみても歩未は笑ってはくれず、結依の手を取ると、自分の太ももに押し付けた。
「えー…と。」
「どしたってば？」
歩未は真っ赤になって、必死に何かを伝えようとしていた。
「あ…熱くなって、ね。ぬる、ぬる…って、いう…。」
不安げな顔で握った手に力を込めてくる歩未の様子に、状況が分かった結依も、つられて赤面した。
「これは…、変、なの？」
「あ、いや…。別におかしいことじゃ…。」
言いかけて、結依は、女の子同士だったら、おかしいのだろうか、と、ちょっと疑問に思った。
「えっ…だって、あの、こんなに、ね…。」
泣きそうな表情で、手を引かれ、結依は歩未のワンピースの裾からそっと右手を忍ばせた。
胸が高鳴って、心臓の真ん中から、体に熱が広がるように感じた。
女の子を抱きたくなった男の子も、こんな感じになるのだろうか。
腕を伸ばして、下着の奥に触れてみた。
中指を少し曲げると、ぬるり、と滑って第一間接を超えるほどまで指先が沈み、柔らかく、温かな感触に包まれた。
「そこ…変じゃ、ない？」
歩未は上ずった声で、結依の腕にしがみつくようにして訊ねてくる。
そんな歩未がたまらなく愛しく思えた。
「うん…大丈夫。気持ちいい証拠だから。ね？」
「あぁ、…そっかぁ。」
ちょっとずつ指を動かしていくと、歩未のそこは、どんどん濡れて溢れてくる。
湿らせた人差し指でまさぐっていると、固くなった大き目の粒が見つかった。
結依は爪の先に少し力を入れるようにして、それを指で弾いた。
「んうっ…ん！」
ひときわ高く喘ぐと、歩未の体は、びくんっ！と大きくしなる。
「え？…な、何！？」
今度は、指に絡まるとろりとした液を、たっぷりと指先ですくい、ぷっくり顔を出した粒に塗りつけるようにくすぐってみる。
「や！えっ？だ、ダメ！それ、ダメぇ…！」
全身をがくがくと震わせて、歩未は、軽くパニックに陥っていた。

結依が、下着の中から手を抜いて両腕で、ぎゅうっ、っと歩未を抱きしめ、そして、耳元で囁いた。
「ね、歩未？もっと、…知りたい？」
歩未は、上気した頬を染めて、完全に体を預け、コクリ、と頷いた。

淡い色のワンピースの上から、うっすらと、ピンクのブラが透けて見えている。
正面から抱きしめて、服の上から、水風船のように張りのある歩未の豊かな胸に顔をうずめてみた。
「わぁ…。」
「ん？ユイ？」
「おっぱい、ふっかふかだー。」
「きゃあー！」
女の子の体に触れてゆく時の、宝探しのようなワクワク感を、結依は初めて知った。
「じゃ、シワになるから、脱ごうねー。」
返事を聞かないうちに、背中のジッパーが、一気に一番下まで下ろされてしまった。
「あ…。」
ピンクのブラのフロントホックも、素早く外され、支えを失った歩未の乳房が、ぽよんとはみ出る。
「ふふっ、脱いじゃえ！」
「えー。ユイも脱いで！全部脱ぐの！」
少しだけ考えて、ベッドから降り、結依は、わかった！と、頷いた。
靴下、ブラウス、ミニのプリーツスカート、キャミソール…次々と勢い良く脱いで、床に落としていく。
「うぉ…。」
半分脱がされたまま、結依のストリップショーを眺めていた歩未が、妙な声を上げた。
「…何？」
「エロい下着…。」
「ぶっ！」
ワンピースの袖と、ブラの肩紐をするりと自分で下ろした歩未は、ベッドの上に膝立ちになって結依の胸に抱きついてきた。
黒地に、ピンクのレースとリボンが映えるセクシーなブラに頬擦りして、うっとりと呟く。
「綺麗な谷間…。」
胸の膨らみと、膨らみを重ねて押してみると、はね返ってくる弾力が面白い。二人は何度も、感触を楽しんだ。
そのうち、歩未の手が結依の背中に回ると、ホックが外され、ブラがずり落ちていく。
「あっ！…ちょっと…。」
胸の辺りから、何か重さのある物体が、ぼとっ、と、落ちた。遅かった。
「…あれ？」
落ちた物体は、肌色のビニール素材に包まれて、中の半固体がぶよぶよしている。
「おっぱい…半分落ちたよ…ユイ。」
渋い顔で、結依は潔くブラを外して見せた。
覗いてみたブラの中身は何重にもパッドが重なっていて、奥にさっき落ちた「偽おっぱい」が仕込ん

であった……。
「…これは…詐欺なような…？」
「…。詐欺、言うな。」
ノーブラになった結依の胸は、少々残念な事情だった。
「えっと、ちっちゃくてもカワイイと思う。」
「うるさいよ…。」
歩未のフォローが全然フォローになってなくって、やけになった結依は、ベッドに歩未の体を押し倒した。
「…襲うよ？」
「きゃー。」
余裕を見せ始めた歩未の唇に容赦なく喰らいつく。
女の子の体の全部を食べたら、甘い味が、するのだろうか。

結依はじっくりと時間をかけたディープキスの仕上げに、溢れた唾液で濡れた歩未の唇を親指の腹で拭って、触れるだけの口付けをした。
とろん、とした目になった歩未に、
「ほら、パンツ脱がないと…汚しちゃうよ。」
と、声をかけて、体を覆う最後の一枚を脱がしにかかった。
「…んー。」
「腰、ちょっと上げて。」
恥ずかしさからか、横を向いて目をつぶりながらも、歩未は素直に従った。
すでに、小さな染みができていた下着を足から抜き去る。
「あ、結依も…。」
「うん。」
脱いだ下着を床の上に放って、全裸になった結依は、寝ている歩未に寄り添った。
横向きに、裸できつく抱き合うと、女の子の体特有のぷにぷにする柔らかさにクラクラする。
結依は、歩未の体のあちこちに、顔をうずめる。胸も、おなかも、ふかふかしてて枕にしたいくらい。

…じゃあ、この下は？

起き上がって、ベッドの上を少し移動。歩未の両足の膝の裏を抱え、足を開かせようとした。
「え…。」
「ね、見せて。」
歩未は内腿に力を入れて、抵抗をみせる。
「で、でも！…変かも。」
「大丈夫。変じゃないか、見てあげるよ。」
「……わかった。」
適当につくろった言葉でも、歩未は簡単に緊張を解いてしまった。
膝の裏をやや上に持ち上げるようにして、足を開かせると、薄めのアンダーヘアがかろうじてそこを隠している。
結依は両手の親指で、ひだを開き割れ目をいっぱいに広げてみた。
鮮やかなピンクの粘膜がわずかに白く濁った液でびっしょりと濡れて光っている。
「わぁ…。」
指を添えると、そこは驚くほど熱く、今にも滴り落ちそうなくらいに溢れている。
「すっごい…濡れてる…。」
「う…。」
「変じゃない。とっても、キレイ…。」

開いたひだの上の方に、２本の指を当てて、指全体で軽くマッサージをすると、可愛がって欲しそうな豆粒がぴょこんと顔を出してくる。
「んっ…！」
「ここ、だよね？…気持ちいいの。」
歩未はぎゅっと目をつぶったまま、首を縦に振った。
綺麗な、ピンク色の真珠…。また、指先で、弄っていると、歩未は艶っぽい声で抗う。
「だ…めっ。そこ…。」
「どして？気持ちいいでしょ？」
結依が意地悪く聞くと、可愛らしい答えが返ってきた。
「だってぇ…、痺れるみたいな、変な感じだし、私の体…、おかしくなっちゃいそうに…。」
「いいよ…。」
ふふ、と笑って、結依は続けた。
「おかしく、なっちゃえ…。」

同じ女の子の体を見ているのに、結依は完全に、欲情していた。
足の間に、頭をもぐりこませて、固くなってきたピンクの粒を舌先でつつく。
「あぁ…、あったかい…。」
うわ言のように歩未が呟いた。
そのまま、唇で吸うようにして舌で粒を転がし、おそらく、誰も触れたことのない内部に、中指を入るところまで挿入してみる。
「…ふ、わっ…あ！…中に？」
強すぎる快感に、ビクビクと、小刻みに体を痙攣させつつも、なお、歩未の体は更なる深みを欲しているように感じた。
「うん、指…入っちゃった。」
指を少し中で曲げてみると、歩未は小さな悲鳴を上げた。そうか。ここが…。
「ここも、いいの？」
結依の問いに、ガクガクと頷く。
内部の壁を軽く引っかくように指を動かす。
言葉にならない甘い声がひっきりなしに漏れてきた。
「イっちゃえ…。」
再び唇をコリコリする粒にくっつけて、ちゅぱちゅぱと吸ってやり、指を執拗に動かした。
中からとめどなく溢れる液が指の動きにあわせて、くちゅ、くちゃり、と妖しい音を立てる。
「あ！…も、もう、ダメ、だからぁ…。」
切羽詰ったような喘ぎを聞いて、頃合い、とばかりに、結依は大きく膨らんだ粒に慎重に、ごく軽く、歯を立てる。
「な！…っあああ！」
歩未の体は、大きく一度、ベッドの上で弾んだ。

受け止めきれないほどの快感の渦が、歩未の中にどっと流れ込み体の力が抜けていく。
ピンクの真珠は奥に引っ込んでいき、結依は歩未が初めての絶頂に達したことを確認した。

荒い息を吐く歩未の隣に寄り添い、結依はそーっと頭を撫でた。
「あぁ…すごい、びっくりした…。」
「気持ち良くって？」
ニヤニヤして聞くと、歩未は火照った体を更に赤くして頷いた。
「あの、さ…。」
「うん。」
「ユイのも、見たい…。ね？見せて…。」
刺激された、歩未の好奇心はとどまるところを知らない。
「…う、うん。」
起き上がった歩未の前に、今度は結依が体を開いた。
なぜか、彼氏との一夜よりも、よほど興奮している自分がいた。
「ホントだ…ピンク…。」
こわごわと指を触れさせると、歩未と同じように、結依のそこも、しっとりと濡れている。
「ぬる、って、するね…。」
「うん…。」
見た感じ、穴には見えないそこに、首を傾げながら、歩未は、そろりと指を押し当ててきた。
「んっ…。」
「うわ！」
自分の指が、ぬるん、と音もなく中に滑り込んでいった感触に、歩未は驚いた。
「中、すごい…熱くなってる…。」
「うん…体、熱い…。」
結依は浅い呼吸を繰り返した。
「不思議…。こんなとこ、男の子のも、入るのかぁ…。」
指は二本に増え、少々乱暴に挿入される。
「うっ…。待っ…」
少し曲げた指が、ずっ、と奥まで届いた。
「え…ウソ…。」
「入っちゃった…。」
無造作に指をぐりぐり動かされるのが予測不可能な分、かえって結依の体を熱くした。
「もっと、…入る？」
「えっ…？」
「だって、いっぱい、濡れて…。」
歩未は三本の指を押し当ててきた。
「む、無理っ！」
痛みを覚悟した結依だったが、驚くことに、十分に濡れそぼったそこは三本の指を少しずつ、確実に

飲み込んでいく。
「あ！…う、う…。」
「痛い？」
「う…ううん。…平気。」
結依は深く、息を吐いて力を抜いた。
すると、それを待っていたかのように、指が最奥に侵入してきて、結依の体は指の根元までしっかりくわえ込んでしまった。
「ぅあ、ぁ…。」
「ユイ…色っぽいね…。」

頭の中で何かがはじけて、結依は突然、がばっと起き上がった。
中に入ったままだった指が、角度を変え、新たな快感を呼んだ。
「あ！…はぁ、待って…。」
手を離した歩未に一度キスをし、勢いに負けて後ろに倒れた隙に足をつかんだ。
自分の右足を歩未の脚の間に割り込ませると、熱く濡れる、粘膜同士を合わせる。
結依のほうからゆっくりと腰を動かす。
ぬるぬるした部分が触れ合う度に、いやらしく濡れた音が聞こえた。
ためらいがちに、歩未も少し腰を浮かせて動いてみる。
「うわ…なんか…すごい。」
「すごい、ね。…すごい、興奮する。…あ…！」
敏感な粒がこすれる場所を見つけた結依は、夢中になって腰を使った。
「あぁ…ユイ、えっちな顔ー…。」
「う…。」
「気持ち、いいんだね…。」
太ももの辺りまでとろとろした液を滴らせながら、二人は、女の子しか知らない快感を貪り合った。
「あん…っ！歩未…私…！」
「うん…。」
結依の腕が空を掻いて、その手を歩未が握り締めた。
歩未の手をきつく握り返しながら、背中からゾクゾクと襲ってくる快感の波に、結依は身を任せた。
「あ！…あ、ぅ…。」
イクときの切なげな表情も、震える体も、歩未は、結依の、全部を見ていた。
なんて…キレイなんだろう。

二人は、呼吸を整えながら、裸のまま一枚のタオルケットだけ横にしてかけ、ベッドに並んだ。
「あー。なんか…色々びっくりしたー。」
「ハハ、私もだよ…。」
「あんな…狭いとこにさ、男の子のものも、入るんだー。」
「…さぁ？」
結依は、言ってしまってから、しまった！、と思った。
「え？」
「ハハハ…。」
「どういう、こと？」
歩未の目が、真剣になっていた。
「うっ…。いや、まぁ、やろうと、したんだけど、さ…。」
「彼氏とだよね？」
「うん、で、ね？入らな…くて、それから、やってなかった…。」
「えーっ！てっきり、最後まで経験済みかと…。あれ？でも…。」
歩未が何を言い始めるのか、大体分かって、止めようとしたが、遅かった。
「だって、あんな、指がぬるん、って…。」
「う…それはいいから…。」
「あ……濡れ…なかった？」
「…多分、ね。」
結依は首を横に倒して、がくっ、と、うなだれてみせた。
「んー。で、でも、彼氏とは仲良くしてるんでしょー？」
あぁ、また歩未は…。結依は仕方なく、苦笑した。
「アハ、こないだ振られちって、今フリーでっす。」
「…あ。…アハハハ。」
ヤブヘビな自分の発言をごまかすように歩未も笑った。

静かになってから、ぽつり、と、歩未が言った。
「私も、東京の大学受けよっかなー。」
「うん…。いんじゃない？あ！一緒に住もうか！」
「ぐぁー、ユイに毎晩襲われるぅ！」
「何、言ってんのー！…昼も襲うよ。」
「きゃー！アハハハ。」
「アッハッハッー！」

その夜、二人は、いつまでも、いつまでも、じゃれ合っていた。

最後まで、読んでくださった方、本当にありがとうございます。
短編か？ってくらい長くなっちゃいましたねー。
さて、思春期の純粋な恋心がテーマだった第一弾に続く、今回の第二弾は、

「　エ　ロ　」　が　テ　ー　マ　で　す　。

(*°∀°)=3ﾊｧﾊｧ して下さったら、それで、嬉しいです。
~~この三人のその後の18禁レベルの性生活を読みたい人は、コメントにワッフルワッフルと…（ｒｙ~~

次は、もう少し、性格の書き分けとか頑張る予定です。
よろしくお願いします<(_ _)>

おにゃのこのカケラ　vol.2　「潮風が吹く ベランダで」

http://p.booklog.jp/book/33525

著者：ゆきの
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/yukino0705/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/33525

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/33525

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.